

<センター通信>Japan Review三〇号をむかえて（その一）

著者	ブリーン ジョン
雑誌名	日文研
巻	56
ページ	50-52
発行年	2016-03-31
URL	http://doi.org/10.15055/00006483

センター通信

Japan Review 三〇号をむかえて (その一)

ジョン・グリーン

日文研が刊行している学術雑誌 *Japan Review* (以下、JR) は今年、三〇号を迎える。大きな節目である。三〇号は「日本型世俗」をテーマとした特集号で、秋に出るが、夏にはもちろん通常号も出すので今年は忙しい。私がJRの編者を引き受けてから七年が経つ。責任の重い、事件の多い、楽しい七年間であった。この場を借りてJR編者の仕事とは何かを簡単に説明してみたいと思う。まず、JRの宣伝をし、原稿を募集するのが仕事である。国内外の学会などに出かけていき、名刺代わりにJR最新号を配り、原稿を積極的に募る。

もちろん日文研内でも募集するが、外国人研究員や専任教員の投稿は少ない。JRの International Advisory Board (世界各地で活躍中の日本研究者一五名からなる。以下、IAB) のメンバーにも、年二回メールを出し、原稿募集を依頼する。インターネットでも原稿を募る。私はJRを日本人の優れた研究を紹介する場にもしたいと当初から考えていたので、日本語の論文も募集の対象としている。日本語のままですら読みにくい、通れば英語に翻訳するという流れになっている。それでも原稿が足りない。編集長として、もっとがんばる必要がある。今年、Association of Asian Studies (AAS、シアトル、四月)・AAS in Asia (京都、六月)・Spanish Association for Japanese Studies (マドリード、九月) にかけて、JRの宣伝をし、いい原稿を探してくる。大多数の原稿はこ

うして直接募るものだが、時に出し抜けに送られてくるものもある。

入ってきた原稿はまず査読に回す。査読者の選定については、編者の専門分野でない限り、I A Bに相談する。推薦された査読者にメールで依頼する。J Rは査読者に謝礼を払うためか、断られることは少ない。ただ、査読報告を書いてもらうのに大変時間がかかることもある。査読者は世界的エキスパートであり、審査においては絶対的な存在である。掲載していいと言われた原稿を必ず掲載する。ダメだと言われたら掲載しない。私は載せてもいいと考えていたものを載せないケースもあれば、その逆もある。原稿をめぐって査読者の意見が割れると、第三者の意見を伺う。

提出された査読報告はそのまま執筆者に送る。却下された原稿に関しては、理由を自分なりに(優しく)説明する。掲載が決まったものについては、「おめでとう」と伝えたい。査読報告に対する執筆者のレスポンスを待つ。編者としての本格的な仕事が始まるのはそれからである。

ちなみにJ Rでは、論文だけでなく書評欄も設けている。各号に、(書籍紹介ではない)書評を一〇点載せる。毎年出版社から送られてくる何十冊の本を一覧にし、I A Bのメ

ンバーに送り、評者を推薦してもらう。最近ではメンバーが自身の指導する大学院生を評者に推薦することもある。歓迎すべきことである。ほかには、I A Bのメンバーや他の研究者から、「この本が話題になっているから書評を載せたらどうか?」、あるいは「最近出たこの本をぜひレビューしたい」といった連絡をもらうこともある。そうした場合、編者が出版社に依頼し、本を直接、評者に送ってもらう。書評を掲載する書籍のテーマ、出版社などに偏りが出ないよう気を配る。J Rの書評は査読には回さないが、編者が原稿を注意深く読み、内容・構成・文体などについて評者にアドバイスをし、やりとりを重ねる。

さて、論文編集に話を戻そう。論文が査読を通ったからといって、そのまま掲載されることはまずない。最も明快で優れた論文でも、査読者は(建設的な)注文をつける。執筆者がその注文に応えているかどうかのチェックを編者は行う。そしてそれらの原稿を綿密周到に読んでいく。序説・結論の書き方、論文全体の構成、議論の展開、論旨の明快さ、文体、脚注のつけ方、参考文献の組み方などについて助言なりコメントなりをする。執筆者自身のため、読者のため、そしてJ Rのために、最善のものへと原稿を磨いていく過程である。

この過程には数ヶ月かかるのが普通だが、一度だけ、二年以上にわたって執筆者とメールのやり取りをしたことがある。

執筆者は英語が母語でなく、また少々難しい理論を使っていたので、原稿の内容には不透明なところもあった。ただ、お互いにとって非常に有意義な、長いやり取りであった。手を組んで修正していったその原稿は素晴らしいものになった。これこそは編集作業の醍醐味だ。執筆者とのコミュニケーションがもっとも密接なのは初校が出るまでだが、再校でも執筆者が修正したい箇所があればなるべく受け入れる。編者も再校の段階になって新しい問題点に気づくこともある。三校は編者だけが見る。

最後に、一冊のJ Rが世に出るまでには、日文研内にある出版編集室の貢献は欠かせない。出版編集室のスタッフは縁の下の力持ちである。彼女らに、初校・再校・三校のゲラの作成、原稿全体のスタイル（文体）のチェック、印刷会社・デザイナーとの連絡などを担当してもらっている。この編集体制の継続は、J Rの将来にとって死活問題である。（次号では、編者が着任してから試みたJ Rの様々な改革について紹介する。）

（国際日本文化研究センター教授）

感謝をこめて

阪口望み

私の一日は、まず手帳を開くことから始まります。小松所長が就任された日から今日までずっと、この一日の始まりは変わりません。新年度ごとに買い換えた手帳は、すでに四冊目も終わろうとしています。

私の仕事はおもに所長の予定の管理、多方面からの依頼の調整が中心です。毎日の所長の予定はもちろんのこと、原稿や回答の締切日、よくやりとりをする方たちの連絡先など、必要なことはすべて手帳に書き込んでいますので、これほど私にとって大切なものはありません。そして今、どの手帳のどのページをめくっても、すぐにそのときの場面を思い浮かべることができます。それほど、所長秘書としての四年間は印象的な毎日でした。

小松所長にあてて日々、所外・所内含め多方面から講演や執筆の依頼、会議の日程調整などの連絡をいただきます。そういった依頼を受けたらまず所長のご意向を確認し、それから相手方との調整に入ります。その際私がいとも気をつけ